

松本千代栄先生に聞く



I. 舞踊学ことはじめ—東京女子高等師範学校体育科の思い出（昭和12年—昭和16年）

学生の時は、体育科が体育と音楽をやるというのがあったから、体育は佐々木等先生、ダンスは戸倉ハル先生、音楽はピアノとかコーラスとか声楽とか、分野分野で違う先生方に接近できたのは幸せだったと思いましたね。しかも、やっぱり佐々木等先生が偉かったんだと思うけれど、芸大出のトップの方をみんな招かれたから、優れた先生ばかりだったから。宅孝二先生とか平井美奈先生とか奥田良三先生とか小松耕輔先生とか、有名な音楽人に教わって、特に宅先生なんかは優れた即興演奏もお上手な方だったし、卒業の時はモーツァルトのコンチェルトを2台のピアノで弾かせていただいて、前日に私が講堂のピアノで弾いていたら宅先生と豊増昇先生が聞いてくださって、当年は皇后さまが行啓なさるところだったから、私がおその連絡で豊増先生にお葉書を出したら、私のことを、前日にあれだけ弾けたことでほめてくださって、わあ、すごい先生からほめてもらった、よかったなど。

そのころ、演奏を収録する会社があって、買わかっていわれたのを私、平気でいりませんと言っちゃったんで、今から考えたらもったいないことをしたなど。宅先生が弾いてくださって、私も一緒に弾かせてもらっているのを。せっかく豊増先生にほめてもらったのに買わないですって。

お茶大も頑張っていて、音楽の一流の先生を呼んで

くださったのね。ピアノも弾いたことがないような、ソナチネの1番か何か弾いて試験曲弾くような人には教えたこともないような立派な先生ばかりだったけど、真面目に一所懸命教えて下さった。それに個人レッスンでしょう。それが一番よかった。体育はどうしても皆一緒だから。

戸倉先生なんか、前でこうやって作品やってくださっても、同級生で得意な人は前の方に行って、私たちはうしろの方に行ってやって見えないようにやっていたりして。戸倉先生がいつも言われたの。あんたの組は宅先生ファンだからねって。

体育科の生徒は、うーん、20人かなあ。もうちょっといたかなあ。ちゃんと名簿、初めから言えますよ。梅沢さん、川村さん、菊池さん、岸さん、久保さん、久保山さん、斎藤さん、坂井さん、多田さん、高山さん、津島さん、都谷森さん、新居さん、西田さん、福田さん、藤沢さん、古沢さん、松本さん、南塚さん、三橋さん、渡辺さん。

こんなこともあった。スキーの実習で草津に行ったときのこと、みんなで一緒につくったスキーの歌があるの。「スキーをはいて生まれ出て、アイヌ娘もお友だち。日本中から集まって、押しも押されぬ体育科。頑張り娘20人って。チャッチャチャッチャ」。宅先生作曲なの。

宅先生、本当にすてきだった。即興でばらばらとお弾きになって。そう。コルトーがね、立ち上がってブラボーと言ったのよ。いい先生に出会って、本当に幸せでした。やっぱり舞踊だしね、音楽と縁も深いし。

Ⅱ. はじめての舞踊教育—奈良女子高等師範学校 附属小学校教諭

奈良は木下竹次という主事（校長）さんがプロジェクト・メソッドというアメリカの自主創造性の教育を取り入れてらしたので、私が最初に勤めたときも、すぐに端午の節句で、子どもたちがクラスで劇をつくって、衣装もつくって、踊りだけになると、私にここでタイやヒラメの踊りを教えてくれとか言うのです。私は、そんな踊り習っていないから、そのとき、四苦八苦してやったのですけれども、私が教わってきたことと、この子どもたちが望んでいることは距離がある、私はもうちょっと創造的な子どもたちに、応じられるようにならないと、この子どもたちの要求に合うことはできないからと思って、辞めて東京女子高等師範学校の研究科へ行ったのです。

そのとき、奈良の学校では1年だったら出してやると言われたけれども、それだと帰らなきゃいけない。ひも付きで行くのは嫌だから、辞めて行きたいと言って、辞めて、もう一度勉強しようと思って東京女子高等師範学校に戻ったのです。

でも、すぐ戦争になってしまったから、自分の思っていることは学校ではなかなかできなかったのですけれども。板橋の造兵廠で旋盤を回して弾つくりになったのです。中央大学と昼夜兼行で1週間ずつやっていたら、中央大学が夜勤のときに夜間爆撃があって大勢亡くなったのです。学校は、やはり学生を死なせたくないと思って、今度は中込という田舎の高原鉄道へ、農業動員で連れて行かれて、そこで敗戦になったのですけれども、そこへ行ったら、食べるものが少ないので持って行った炒り米とか、みんな食べ過ぎておなかが壊れるんです。だから…。

それで、仕方がないから、おなか壊れた人には、近所の農家からじゃがいもを買ってきて、じゃがいもをすって葛湯をつくって飲ませて、その絞りかすを平らにして、お塩をつけて焼いて、足りない人に食べさせてとやっていたのですよ。それで敗戦の報があって、敗戦になったら、東京も戒厳令で入れないから、それぞれ自宅へ帰せと。みんな帰したころ、私が乗れるころはもう1週間もたっていました。汽車に乗って、外を見たときの、山の景色はきれいだったのを覚えていて、国破れて山河ありというのはこのことかなとしみじみ実感しながら帰ったのです。

それで1ヶ月ほどたったら、繰り上げ卒業させるから上京しろと言われて、上京して卒業したのですけれども「おまえたちのやった戦争は違っていたのだ。教育は間違っていたのだ」と言われても、何を目的に教師になっていったらいいかわからないから、靴磨きでもしようかなと思って、神田

のガード下に見に行っただけです。そうしたら、大勢の人が座って、アメリカ兵の靴を磨いているのです。

やはり靴磨きにもなれないなと思って、奈良の同僚にそのことを手紙で書いたら、すぐ主事の武田一郎先生から手紙が来て「国敗れて教育の目的を見失っているのは松本さんだけではない。日本全国の教師がそうだ。でも、教師が教育の目的を見出すまで、子どもは大きくなるのを待ってはくれない。悩みながらでもやらなければいけないのだから、もともと手放したくなかった人だから帰って来なさい。僕たちと一緒にやろう」と言ってくださったので、もうすぐ帰る決心をしたんです。

お茶大（東京女子高等師範学校）の事務局長は「このままいれば助教授、教授と大学の先生になるのに、なぜ小学校の先生に戻るのだ。ここで言いにくいことがあるのだったら言いなさい」と言われたのですけれども「別に言いにくいことはない。ちょっと考えるところがあって、ゼロからやりたいと思って帰ります」と言って帰ったんです。

奈良で6年間ぐらいうちやって、子どもを教えたら、子どもはそのうちにいろいろなものを……、自分たちで珍しいものを見つけてくるという約束を毎週やっていたから、見つけてきて、ぐじゃぐじゃっとスキップのようなピアノを弾いて、みんな集まって出てくるでしょう。みんな集まったと思ったら、また別の音楽にして、ぐじゃぐじゃっとやると、見つけてきたものを自由にやるという約束をしていたのです。そうしたら、ハツカネズミを飼っている人がコマ回しをしたり、仔猫が自分のしっぽを追いかけているところをやってくれたり、いろいろなことを勝手にやってくれて、私はその間、うじゃうじゃとピアノを弾いていたんです。そうそう、立ってよそを向いて弾いているんです。子どもを見て弾いているんです。そう、うじゃうじゃとヘンナ長調と言っているんですけど。それから、グループになって、自分たちで、題を見つけて好きなことをやるというふうにやっていました。あるとき、そのヘンナ長調の突拍子で、子どもの音楽性を阻害するかもしれないと思って、一時、夜行で上京して、宅先生にその話をして。先生は即興の名手だったんですけど「でも、君、それが音楽だよ。それでいいんだ、それでいいんだ」と激励してくださったから、相変わらず突拍子で弾いていたんです。

放課後は、子どもが帰ったらそのあとは体育館のグランドピアノがあったので、それですと練習していたんですね。子どもがこんな伴奏をしてくれていわれた時に、そのような感じの音をうまく助けられるかって。そうしたら、教頭の清水甚吾という先生が、運動場の裏門から帰られるの

ね。毎日、私がピアノの練習をしているところへ寄って、若いのによく勉強しますね。あなたは今に偉くなりますよって毎日激励してくださって。私は恐縮していたけど、毎日その言葉に注文されたように何か弾こうと思っても弾けないじゃないですか。だから変な長調を突拍子な音楽を弾いていた。

男の子が風みたいになって飛んでいる、写真があるでしょう。そのとき岡本忠士という子どもが即興で踊ったんです。もう亡くなってしまいましたが、体が小さかったから、私に、自分はダンサーにはなれないから、舞台美術をやるようになるんだと小学校からずっと言っていたんです。だから、そのとおりになって。テレビのサザエさんの美術に、岡本忠士と名前が出ていました。定年になってからは、有楽町の突き当りのところで絵の展示会をやっていました。見に行くと、いつも来た人に「これが僕の先生です」と紹介して「私、絵の先生じゃないんですけど」と言っていましたけど、若くして亡くなってしまったんです。

真面目に子どもたちを邦正美の舞踊を見に京都まで連れて行ったりしていました。それで感想を書いた絵を出させると、もう、色々なことをみんな気が付いて、私が気が付かないことでもね。自分たちは手足を動かすけど、あの人は顔も動かしてされますと。邦さんというのは表情も使う人だったから、皆そうやって細かいことも気付いてきて、その真似をやった。

それで低学年の子は、つぎたし話みたいにして、私がお話ししていたら、こう言うの。ある時カタツムリが木に登ってきましたと。そうしたら、肋木に登っちゃったんですよ。そうしたら、降りようとしても降りられないでしょう。だからどうしたら降りられるだろうと。木の下を自動車がブーブーと大きな音をたてて通ったので、みんなびっくりして首をすくめたら下に落ちこみましたって言って、やっと降りてくれたんで、それから家へ帰りましたと言って。どんなつぎたし話をしようかなというのを低学年の時は苦労していました。

まあ、あとでも思うんですけど、やっぱりあの子どもたちに出会って、奈良の教育に出会わなかったら、もうこんなに長く先生していなかったかもしれないと思う。やっぱり子どもって、今日だめだと思っても、ぱっと次の日には変わってできるようになるんですね。いつも珍しいものや面白いものを見つけてくることと約束していたから、じゃらじゃらっと音楽を弾いていたら、子どもがハツカネズミが車を回してたとか、仔猫が自分のしっぽを追いかけてたとか、好きなことやってくれてね。身体の動きが違うことができるでしょう。面白い動きを一杯やってくれてね。そういうのをやっていて、そういうことを工夫してやるように

なりましたね。参観人がないことがない学校だったから、参観人がこれは何の時間ですかって聞かれるから、体育の時間ですと言ったら、みんなへえと。でも奈良には、やっぱりあれは木下竹次の自主創造性の学習を持っていたから、私にそんなして好き勝手にやらせてくれたのですね。

おかげで、やっぱり奈良で経験したから、一生これを仕事として歩くようになったかなと思いますね。

Ⅲ. 東京教育大学の舞踊学講座

東京教育大学の竹之下休蔵先生が奈良に来て下さって、1年から6年までの授業を全部見て下さいました。松本さんがここで教えている子どもは幸せだと。でも、あなたが教育大へ来たら、あなたと同じでなくても思想を受け継ぐ人が育つから教育大へ来なさいと。私は、子どもに後ろ髪を引かれるような思いがありましたが、恩師の勧めだからと思って教育大へ来たんです。

私はやっぱり竹之下先生に影響を受けたから、あの先生はドイツ語、英語がべらべらでね、研究室にいらしても十分研究はおできになるのに、全部現場研究に捧げられたでしょう。だから「都市と農村における学校体育の実証的研究」というのを3年間、蕨山と川崎の小中でなさった時に、一回も休まないんだったら入れてやろうと言われて、休みませんと言って。実は、私は梅田利兵衛先生の部屋だったから、竹之下先生の下でやらなくても自分でできるんじゃないかって言われたけど、私は自分の教わった先生だから入れてくださるならやりたい。梅田先生がいいでしょうと言ってくださったので3年間通ったんです。

竹之下先生のこの研究の方針がはっきりしていて、1年目は相手が聞いたことだけ答えて、こっちからは何も言わない。2年目は、みんな思うことはそれぞれ全部勝手に言えばいいって言われて、どの先生も、竹之下先生でさえ、帰りの列車になったら「誰かほめると思ったけど、誰もほめなかったね」と言われたから、私が「先生もほめられませんでしたよ」と言ったら、「ああ、そうだったかな」と苦笑いなさって。みんなが言いたいこと言うから、ぺちゃんこになって1週間ぐらいは授業できなかつたんですって。何くそと思ってむくむくと立ち上がってやって、3年目になった授業を見て、竹之下先生にいかがでしたかと聞いたら、「ああ、何も言うことはありませんな」と言われたので、これで及第の授業ができた。

後で校長先生が言われたのだけれど、1年目に先生方が何か言って下さると思ったなら何も言わないから、校長先生はあせって自分がいろいろあれ

やこれやといらんこと言ったから、かえってこの研究の邪魔をしたと反省して言ってもらした。本当に先生方もよくなさって、子どもたちも自分たちなりに見つけてきたり、相談して、発表会も自分たちでやろうとか、私にも色々伴奏音楽の注文があって、あんなスポーツ放送の前に鳴るような音楽を弾いてくれとかね。

その当時、戸倉先生がパリの国際会議に出席なさる時に、ちょうどお茶の水の附属幼稚園の講習会とぶつかっていたんですよ。幼稚園側は、大事な講習会の時に行ってもらったら困るって言うしね、国際会議に行かなければ日本のためにはならないし、だから私たちが園長の坂元彦太郎さんのところに行ってお話ししたら、坂元さんも、「これは戸倉先生が命をかけてやっていらっしゃる幼児教育にかかわることですよ。今後、戸倉先生とは関係ないと言ってもいいんですか」と言われたから、私たちは「よろしくお願いします」と言って帰ってきました。あとで戸倉先生に来てもらってくださいと言われたから、戸倉先生がおそるおそるいらした。そうしたら、「半兵衛、官兵衛、先生はいいお弟子さんを持たれましたね。どうぞいらっしゃってください」と、にこにこして言ってくださったんですね。それで、戸倉先生、帰ってきて「半兵衛、官兵衛、って、おまえさん、何のことだい」って言われたので、私たちが「そうだっていうことですよ」って言ったら、ええと。「どこがいいところなんだろうね」なんて言われちゃって。

戸倉先生には、パリで全部通訳が付いてくださったから、中身はある程度ちゃんと理解できて帰っていらっしやいました。YWCAで帰朝報告をしてくださったりして。まだ外国に行けない私たちににとってはとても刺激になってよかった。

教育大では、野外運動の梅田先生のところでしたけれども、舞踊の講座が必要だ、必要だと言い暮らしたら、舞踊の講座をつくってもらいましたね。学部長が文部省へ連れていってくださって、ちょうど会計課に寄ったら、私の顔を見て、会計課長が「ああ、舞踊学3年目ですね」と覚えてくれていて、その年に通ったんです。

そのときに「これは教授ポストが一つ増えたというだけではない。この領域が学問研究に値するということを文部省が認めたということに価値があります。だから、一所懸命やってください」と言われて、そうだなと思って一所懸命やりました。

Ⅳ. お茶の水女子大学の舞踊教育学講座

大学紛争で全国の大学が色々揺れ動いたでしょ

う。教育大でも男の先生方はみんなお辞めになり、お茶大の体育も御多分にもれず潰れて、学長はもうそんな難しい学科はやめて、国文とか英文とかにしようと思って文部省へ行かれたそうです。文部省では「そういうのは東大にも北大にもいっぱいあります。ないものを再建してください」と言われて、この難しい学生に対抗できる気の強い先生は誰かと探したら、私だったと。私は、文部省の人が「舞踊学は教授ポストが一人増えたというだけではない。この領域が学問研究に値するというふうに認めたところに講座ができた価値があるんだよ」と言ってくださったので、ああ、そうだなと思って、しっかりしなきゃ、この領域をちゃんと実らせていかなくちゃならないと思っていたから、けんもほろろにお断りしたんですよ。

そうしたら運動学部長の浅川先生から呼ばれて、「松本さん、女子高等師範学校は高等師範の姉妹校できた学校だから、困った時はお互いだから、助けるのは当たり前だから、あんたは行って助けてあげなさい」と。

そのころ教育大は筑波移転で、移転したら舞踊学の講座が1.5倍になると約束があった。あなたがお茶大に行っても「1.5倍の約束は守る」と言われて、しぶしぶお茶大に移ったんです。でも、私は体育のゼミ、全部を持ってないからと言ったら何を持てるんだっていうから、舞踊だと。で、舞踊教育学というのでよければと言って、ああ、それでいいということになったのね。

お茶大に来たら、幼稚園長もなさっていた教育の坂元彦太郎先生が、お茶大の幼稚園が講習会をやっていて大勢集まる。それを見てね、「附属幼稚園のやっていることは古い。すぐ松本先生に習え」と言われたけれども、附属幼稚園の先生はなかなか「うん」と言わなくて。みんな戸倉ダンスを教えるのが当たり前と思ってやっていたから、こんなふうに自分勝手に踊るんだと言っても、幼稚園の先生はなかなか承知できなかったのね。それを坂元先生はすぐ、100人だか1,000人だか集まって、それでいい気になっているのは駄目だ。お茶大には似合わない。そんな古いものはやめなさいと言って、講習会をいっぺんにやめさせられて。お茶大の古い幼稚園の卒業生に恨まれちゃったりして。

Ⅴ. 舞踊学会の設立

お茶大へ来ると、みんなそれぞれ違う学間で、しかも身体を動かすのでなく、実技は音楽と体育だけでしょう。やっぱり何かきちっとした体制を發展させていく組織というものがないと、自分たちが勉強する目安もつかないし、人との切磋琢磨

もできないと。それで学会の必要性というのを感じた。お茶大じゃなかったらそうは思わなかったかもしれないけれど、他の学問に匹敵してやれるようにしないと、ここでは学科は育たないと思ったの。

お茶大は学問の府だから、講座ができて学会がないと言うと、そんなのは学問じゃないと言われると思って舞踊教育学をやる以上は学会が必要だと。それで日本舞踊の著作のある郡司正勝に話しました。それから、日大の日本舞踊の講義をもっていらした目代清さん。それから評論の市川雅さん、その3人にお話して、舞踊学会をつくりたいと。それはみんなも賛成してくださって、みんなに推されて松本さんも副会長の席へ就いてくださいと言うので出発したんだと思っています。まだほかにもいらしたと思うけど、ちゃんと私の記憶で確かなのはこの郡司さんに頼んだのと、日本舞踊の目代さんと舞踊評論の市川雅さん。舞踊にかかわっている方だから、やっぱり消え去ってしまうしね、舞踊だけだと。学会もあれば、研究も残って行って、色々な発展に役立つと。皆さんはすぐ賛成してくださったので、声を掛けた方はみんな立ち上がってくださったと思います。

お茶大につくる以上は、あそこは学問の府だから、やっぱりただ実技をやっていますと言うだけでは駄目だからと言うのでね、それはもう毎年発表を休まないというので、できてもできていなくても、よいものでもよくなくても、きちんと1年に一度は発表するという習慣を皆さんも持ってくださいと言って、仲間には声をかけました。

やっぱり消え去っていく分野だから、何もしなかったら何か一所懸命やった先生の努力も残らないというか、世の中にも本でも出れば認めてもらえるけど、実演だけだとその場に来た人だけにしか価値を分かってもらえない。学会をやることで皆さんにも知っていただけるし、それから大学にいる人はやっぱり業績で昇格しなきゃいけないでしょう。なかなか実技だけだと、それでは昇格してもらって証拠がないと言われるから、やっぱりそのためにも学会は必要で、大学人を確かにする、成長させる、存在を明らかにするという役割も、中身のよくできていたかできていなかったかは別として、学会に発表する姿勢を持っている先生が学校の中でも一応評価されてきたのではないのでしょうか。今でもそう思っているけど、そんなに発表した中身がずっと重要に舞踊に影響を及ぼしていたということは、あまり確かには言えないことばかりだけど。

上林さんとか、若松美黄さんとか、色々変わった方がいっぱい、一家言のある人ばかりが入ってくださって、にぎやかでしたから。舞踊学会もね、玉石混交だと思うの、どうやってもね。やっ

ぱり消えていくものをやるというのは、不確かなところがあるから、方法も不確かで、だからその方法もきっちり決まっているような学問のようにはいかないけど、それでも何かをきちっとしようという足並みがあると、共通の話し合いができるところもあるし、それでやっぱり捕まえられるものもあるから。

Ⅵ. 子ども達と舞踊教育

ダンサーの教育と舞踊教育ですか。舞踊教育はやはり自分と違った子どもをちゃんと伸びるようにやらなければいけないと思うんです。自分と同じ子どもを上手に教えるのは楽だけれども、自分と違う子どもを受け入れて、その子が伸びていくようにちゃんとヒントを与えたり、多様性を包容しなければいけないと思うのです。ダンサーだと、もうその先生の持ち味に合う子たちを連れて行って上手に踊れるようにすればいいというところがあるから、やさしいというか、素直に自分の適性だけでやれる。舞踊教育では、自分と違って、その子どもが向いたほうをよくつかんで、その子どもが伸びるように方向づけなければいけない、子どもを自分一色にしようとはしないで、その子どもの特性に合ったように仕向けられるだけの包容力、眼識があるということが必要だと思いますね。ダンサーの稽古場だったら、その先生の適性に合ったところを自分が選んでくると考えて、自分の適性を生かして子どもをそちらのほうに伸ばしていこうとすればよくて、合わなければ、子どもはまた別のところへ行けばいいと思いますけれども、学校はそれだけ多様なものを擁していくから、先生に包容力が必要ですよ。自分と違った子どももちゃんと認めて、そのように生かしていくというのは必要だと思いますね。

視野を広くする、だから、大学の先生だったら、附属があったら、附属とか近所の学校とか、ちょっと訪ねてやらせてもらおうとか、見せてもらおうとか。大学生だけを教えていないで、そういう目も養われたら豊かになるんじゃないかな。

舞踊学会は、舞踊そのものの特性ということを考えてやっていければいいと思っているのですが、女子体育連盟はいろいろな子どもを1人の先生が教えるという条件にあるから、多様なものを包容できる教師というのを育てていかなければ、いつでもいけないのではないかなと思います。

舞踊大学ですか、得てして、そこへ行くと、その先生の方向にやらなければいけないという大学が多いから、入ってきた人の個性を伸ばしてくれるような大学はあったほうがいいと思うんです、子どもは一色ではないから、合う人も合わない

い人もありますものね。その先生の方向に連れていかれるだけだったら、お稽古場でやっけていても同じになるから、大学の意味は少ないと思うんです。それぞれの個性を伸ばせるような大学はあればあったほうが良いと思います。

やはり自分は体育だったけれども、音楽と体育、健康という学科を出させてもらったから、体育も不得意だけどちゃんとやれるようにしてもらって、音楽もピアノ、声楽と専門の先生が教えてくださったから触れているのよ。それに、奈良の子どもの教育の中で育ったから。

体を動かすことは、特別な人を除けば子どもはみんな好きだからやりやすいというところが一番基本にはありますね。私も仕舞を習っていて、公会堂なんかで舞わせていただいたけれども、すぐ覚えてやっていました。

子どもだと、教えたらすぐ変わるでしょう。学生は余り変わりようがないから、おもしろさも余り印象に残らない人が多いですね。男の子は奇想天外なことをやられる。女の子は割と型にはまったことをやるから、分かっているようなことをやるから余り珍しくない。男の子がおもしろいと思いましたね。教育大にいるときは男の子がいたから、田中浪君とか、筒井君とか、船に乗って、船の中から電話くれて「筒井です」と言ったきり、あとは私がしゃべるといような男の子にいっぱい出会った。

やはり自分に新鮮さがないと子どもを新鮮にはできないから、自分が年をとったなと思ったら、もう子どものことはやめたほうが良いという思いがありました。自分が若々しいと、子どもと同じ気持ちでできるけれども、年をとると、やはり柔軟性がなくなるから、なくなったら、もう子どもの先生は辞めたほうが良い。おとなだと理屈でいくところはあるけれども、子どもは感覚でくるから。先生も楽しいし、子どもも楽しい。

教育大では、自分がもう実技する年齢じゃなくて若い人がいたでしょう。いなくなったらやったかもしれないけど、若い人が実技をやってくださっていたから、自分は講義だけをやっていればよかったというときがあります。やはり体も気持ちも澁澁としてないと若い人には対応できないから、いつも澁澁としていられる年齢という制限がありますね。

でも、本当に、自由にできるような世界でやれてよかった。そうね。やはり物見高いんじゃないのかな。何でも興味深い。嫌なことはやらなかったというか、やりたい放題にやっていたからストレスはなかった。決まったことを教えるだけではなくて、年齢とその子の興味に合わせて、勝手にやれば良い世界というのはあってよかったと自分で思っているんですけど。決めたことを教える

ことはやさしい、だから指導者の教育というのは、どれくらい上手にできるかはずっと長い間いつでも問題ですね。

夢ね、オリンピックを見たいと思っているの。母は100歳と3カ月だったから、母の年まで生きたら東京オリンピックは見られるんです。そこまで頑張って東京オリンピックを見たいなと思っているんです。

(2015年4月27日、6月1日、大塚の先生宅にて、
文責古井戸秀夫・安村清美)

後記：松本先生は、いつもお元気である。96歳を迎えた現在、書と絵画を生きがいとなさり、まさしく創造的な生活を実践していらっしゃる。リハビリが必要なお身体になられても、それさえ楽しんでいらっしゃるようにも感じられ、美しいものを求めて日々過ごしていらっしゃる。このインタビューは、舞踊学会の40年という節目の時に、その設立を中心に、まさしく歴史の証人として、私たちに想像もつかない激動の戦前・戦中・戦後を生き抜き、舞踊学と舞踊教育に人生をかけていらした先生の、穏やかな回顧である。舞踊を通して人と出会い、人を愛し続けていらした先生、常にファースト・ランナーでいらしたご苦難を、にこやかに語られる語りの中に感じられる先生のおおらかさに改めて感服している。そういえば、先生の米寿の出版記念でのご講演のタイトルは「いただいた道標」であった。この稿は、松本先生から舞踊学会と舞踊を愛する私たちへ道標であるかもしれないと思う。(安村清美)